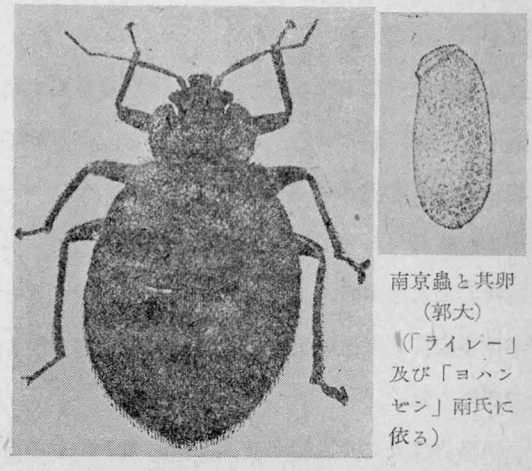
通俗防蟲科學

南京蟲の話

山田保治

南京蟲が、蠅、蚊、蚤、などと共に、家庭害蟲の一つとして、吾人の生活能率を、低下させて居ることは、周知の事實である。而して、一般には、南京蟲に刺されることをのみ、恐れられて居るようであるが。此蟲は單に吾々を刺して、痛痒を感じさせるばかりでなく。彼の恐るべき「ペスト」病菌の媒介者であることが、最近、究明せらるるに到つた今日。南京蟲退治の重要性が、今一層痛感させらるるのである。殊に、第一線に活躍せらるる皇軍將士の上に思ひを致し、將又、大東亞諸民族發展のためにも、之が撲滅を計ることの、極めて必要なる所以、又此處にある。而して、恰かも、戰爭開始前に、敵の狀勢を知つて置かなければならないのと同樣に、害蟲を退治るには、其前に害蟲其者の生活狀態を、知つて置くことが、之又、必要であることは、敢へて此處に贅言するまでもない。此意味に於て、此蟲生活史の概要を、次に述べることとする。

南京蟲驅除劑に就きては、既に、武居博士が、本誌第四號の本覽に於て詳細に解說されて居るから、是非參照を希む。



南京蟲と其卵（郭大）（「ライレー」及び「ヨハンセン」兩氏に依る）

南京蟲は、元來、日本內地には居なかつたものであるが。琉球や朝鮮、滿洲國並びに支那、には古くから居た。處が、我が日本內地へは、何つ頃から入つて來たかと云ふに、維新前、幕府が、外國から古船を買つた時、偶々其古船と共に入つて來たのが、我が內地侵入の最初であると言はれて居る。尙ほ又、幕末の頃、長崎へ出入する和蘭の獵船に、此蟲がたくさん居たので、當時水夫仲間では、此蟲のことを、蘭名「ランドロイス」の名を取つて「ランドラムシ」と呼ばれて居た。

其後明治となつて、外國船が、方々の港に出入するやうになつてからは、北は、函館、室蘭を始めとし、横濱、神戸、其他、港の町に、此蟲の發生が見られるやうになつた。日清戰爭のとき、凱旋兵士の荷物と共に入つて來て、鎭臺(師團)の所在地に、此蟲が出たと云ふので、當時此蟲を鎭臺蟲とも呼ばれて居たことがある。又、床から發生すると云ふので、床蝨、寢臺に發生するからと云ふので、寢臺蟲、と言はれて居るのは、何づれも歐語の譯名である。兎に角其の樣な經路を辿つて、我が內地へ侵入、繁殖するやうになつたのであるが、今日では內地到る所の都市に、發生被害を見られ、特に工場や病院の寄宿舍などでは、此蟲のために惱まされて居る所が頗ぶる多い。

南京蟲は元來、野生の獸類や鳥類に寄生して居たものが、人類が之等の動物と接近するやうになつてから、次第に人類に、寄生加害するやうになつたのだと言はれて居る。夜行性の昆蟲で、晝間は、壁や柱の割目、或は家具類の隙間などに、潛伏し、夜になると出て來て人を襲ふ害蟲である。

雌1匹が產む卵の總數は、百粒內外と言はれて居る。其卵を壁や柱の割目とか、家具類の隙間などに、產み付て置く、此卵が1週間位すると幼蟲が孵へる、孵へり立の幼蟲は、全體が黃白色で透明であるが、吸血するに從つて赤色を增し、後には赤褐色となる。孵つた幼蟲が、成蟲になるまでの日數は、30日乃至40日位と稱されて居るが、食物が充分に得られないときは、更に多くの日數を要する。而して、1年間に於ける此蟲の發生回數に就いては、未だ判然しないが、日本內地のやうな溫帶地方では、春から夏の終り頃までに、3回乃至4回位發生を繰り返すのではないかと思はれる。

南京蟲は一種不快な臭ひを出す、惡臭を出す場所は、幼蟲時代は腹部の背上に、成蟲になると中胸下側に開口せる、1對の孔から、何か刺戟を受けた時に、黃色の液體を分泌する、其液體が、彼の樣な惡臭を發するのである。又、此蟲は隨分長い間絕食に對へ。1年間もの長い間、斷食したまゝで生存したこと。卵から孵つたまゝの幼蟲が、食物を得なくて、數ケ月間も生存したなどゝ云ふ、報告がある處から考へると。南京蟲が發生したからと言つて、半年や1年位空家にして置いても、此蟲の根絕はむづかしいと考へられる。又、寒氣に對しても、抵抗力が頗る強い。

幼蟲成蟲共に、人體を襲ふて吸血するのであるが、刺されると酷く痛味を感じ、刺された部分を搔くと、皮膚は腫れ上つて、赤い斑紋が現はれ、遂には加膿することがある。併しながら體質によつて、痛味を感ずることが、少ない人もあると言はれ、刺されることが、度重さなる

に從つて、痛味が減退するとも言はれて居る。

斯の樣に、一般には、南京蟲に刺されることを、恐れられて居るのであるが。先にも述べた通り、吾々が南京蟲を最も恐れる點は、此蟲に刺されることによつて、種々の惡質傳染病菌を媒介する、可能性のあることである。殊に熱帶地方では、之れが甚だしいと聞いて居る。

南京蟲は2種類あつて、日本內地に居るのは、最も普通の南京蟲、卽ち「トコジラミ」と稱へられて居る種類で、世界各地に擴く分布し、西比利亞のやうな寒帶地方にまで棲息して居る。今1種は「タイワントコジラミ」と名附けられて居る種類で、主に、東洋の熱帶亞熱帶地方と亞弗利加に分布して居る。而して此種は、我が領土內では、朝鮮と臺灣とに棲息することが知られ、印度地方では、「ペスト」病菌の媒介者として、醫學上重視されて居る害蟲であることは特に注意を要する處である。兩種とも、加害の仕方と被害の狀態は殆んど同樣である。

今や世界の重點は、我が日本に集注されて居る。其重點の核心が、大東亞建設にあることは言ふまでもない。從つて、之が完璧を期するには、一に、健兵健民にかゝつて居る。此秋に當り、南京蟲驅除劑として生れた、『蟲研』の效果が、一般に認められ、多大なる好評を博するに至つたことは、之が、防蟲效果試驗研究に、携さはつた者の一人として、誠に嬉れしい。而して、余が喜こびとする處は、之によつて、聊さかなりとも、人的資源の確保に、寄與することが出來得るからである。尙ほ又、『蟲研』は、到る所の家庭に發生して、吾人を惱まし、特に、近年著るしく其被害が酷くなつて來た、「イヘダニ」退治に、效果が極めて顯著である。「イヘダニ」の解說は、次號で述べることゝする。(終り)